

利己と利他：ウエーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」より。

- ルターの説くプロテスタントの職業観念を、「カソリックのように修道僧の禁欲を世俗内の倫理より高く考えるのでなく、神に嘉（よ）みせられる生活を営むただひとつの道は、各人の世俗上の位置から生じる世俗内の義務を履行することである。そして、これこそが神から与えられた「天職」にほかならぬという考えであった。」と解説する。(p.270)

- 「時は金銭（かね）であることを忘れてはならぬ。 - 中略 は-信用は金銭（かね）であること忘れてはならない。 - 中略 - 支払いの上手な人は万人の財布の主人となる。約束の期限までに、支払うことで定評を得ている人は、友人がさし当たって必要としないかねをいつでも借りることができる。 - 以下略」

別の個所でのこの記述は、「時は金」と「信用は宝」、まるでSCCCの解説だ。

「支払いを早める」ことは、信用から協業関係への進化、遂には神に嘉（よみ）せられる行動であることを示唆する。

- **アダム・スミスの真逆の命題**（同じ、マックス・ウエーバーが同著の中で解説）

「われわれが自分の食事をとることができるのは、肉屋や醸造業者やパン製造業者の恩恵のたまものではなくて、**彼らが自分の利益を尊重するからである。我々は彼らの人道精神ではなくて、この利己心に訴えているのだ。**」

かくして、個々人の私利をめざす行為（利己）に任せておけば「神の見えざる手」により社会全体の利益（予定調和・需要と供給の一致）が達成される、という「近代経済学の父」アダム・スミスの命題。「利己」の限界は、その後の歴史が証明している。

- さて、流れ創りのモノづくりとそれを支えるSCCC指標は、「利己」か「利他」か？

「回収は早く、支払いは遅く」では「利己」で、金の流れは淀むが、「回収も支払いも早く」だと、サプライヤーも国も助かる「利他」。

- ただ、日本には、プロテスタントの精神にも似た、「三方良し」経営という利他の精神がある。原点「ものづくりの心」も日本中小企業には少なからずある。

- ◎ 原点：ものづくりの心とは—

- 客の喜ぶ顔が見たい
- 手間をかけてもいいものを作りたい
- 人に真似できないものを作りたい
- 世のため、人のためになれば最高

- ◎ さらに具体的には、資源（人・機械）稼働重視のフォード的生産方式は自工程の都合で出来高を上げることを許容する「利己」、一方、モノの流れを重視するトヨタ式には、次工程の必要数以上に作り流れが淀むことを許さない「利他」の精神が核心にある。利他の象徴SCCC、これを導入しない手はありません。